南谷集

全

南谿集

羽州羽黒山連編

松童窟文二撰

序

行元禄の二年芭蕉翁の羽織を出羽なる
三山詣の折から今宮の岡梨を訪ひ
南谿と須池を休めの折い水無月の初り
まにて三年の月交せる情こそやう
なるより奥の細道の記をいちはや
ものあるまゝ百年せあまり星
うつりとゝ知らいかに貴岡とも称ぶし
天竺の草の結さへまのあるまゝ
されい三年をうつの根を倚のひ仏座の
呂丸よ柔弱海を抜い出流の松森よ
同り雲氏の伽森の新まいなるまゝ
ん優婆のまゝ偽ちまゝ樹石まゝ
のうゝ想係をうるあゝ山を
一味堂老師の風雅ゝ

ゆかりあるひとの縁の人々を引て一基の
石塔をたてゝ祖師の古跡を不朽の
後代に伝ふ此道場の仏法の師恩を仰ぐ也
又此山の名をして遺詠を後の世に
幕末に至るまで信仰を絶ず一山の
繁昌を祈に四海皆蒙る所の也
則瓊音を勒して文化実和の比月
十二日を合て葬儀を執行ふ唱導の時

1818

玉泉寺と云へり法坂ふ三百月塚を
拝ふ此所に祭る所の物は神霊仏
の地なるか祈りをかけまい
さん是より祖師の高徳なる偉
山の勲功をしるや抑南谿紫苑も
拝ふ別当宝前院の別院や此境や
清涼寺をして只時の風光いとを
ふ春い梅花南の名にいやく

夜は月さやかに渓の底にひゞき月の山
突兀として千載の雪をいたゞき渓水
流れ漫々として秋の夜月の氣を浮へ
たる趣し松竹ちゝに枕襟を洗ひ
耳を清む世塵は一時に消す片月
かゝしけるも山寺の太夜教割の
誦經しきこえは秋葉をおのしたるに
夜落ちむし此院にすまひたまひけり

俳諧の道におもひ今我等の手向る
鄙言ともは吟すれはあるしも歎しくの
席末につらなる人も中に入人も徒を
忘はてさるはなかりき されは世事のあらまし
松に紀をふた師の靈はあはれと老骨
經す波めて圓辭すれはゆるされす
つゐしおはす庵の主ちくるめてたき
時にあひぬる喜は此道に於ての本懐

何事ぞ見るもうんぬと大泉の市にうる
松皇室家文二聖をもとめて拙なきを
深めるもなくしく誠忠し秘書百編

めて珍くこれまでこそ宋古多
ゐまの事ぞ憐れ価掃　一味堂
子室を又福の中れひろめて　自香
いにしへのくに足貸てやれ　太素
和の月海入川のうるおくや　山爾
弾ずもけつて吹とうり　四芳
凡炉ふへも友行ふ佛くへを　洛遊
ゆうゆう袴の何ゆうるん　文郁

浦くとうけて縣の徒うらぶ　五狂
家所よりくくる橘の深　和太理
いさかひもせずふる屋てやり　如流
孤燈ともてこるくさもの　卜柳
雪ふる師走の累れ掃しい　不染
をこるも蔦の塔よりも　如舟
そむく名ぞさ旅治の住ぶ　共話
梓の方よ聊氣怖れ　蘭里

ものいふ月もおろかのたくふり　友山
四たけもあさ結の仍ふ　文井
まろうとをもの誘ひよ吾書ら　茶好
鼓のよたれ赤も中く　保泉
見れい只の日の仏を言ふ　一毛
うけうう文て罪よふる宅　茹芝
盗めとて移ものふ広　畠　向峨
雲　流水も皆　あうひう　思月

竹葉

呂秀

文鶩

一簀

圓月

三省

潮路

古梅

文粧

可橋

琴而

文明

和さかきをとりふるまのあるるのもとを四
ぞうふへさの志しより此寺谷に祖義僧と
造立してを求れ家しを祈るの人こゝね是
ら此社中ゝ〻り泌や他話自然の造化を
りつさ拾んこを方情の多歌し此情の美
ホしをくくなるるの友ふさんや宗服を
印の家月れまうて空しいとうくかれい
を祈もをくあ由ゝを宝しは芭を侍るる
こを收し接をして五をこを芭を
経も今四初るりや仏書の日 僧 自香

仏を多り 仏芳る香る 竹 法花
咲ぬれなのこゝろやりよのる 以一
叶こをもふてうしるゝ 保多
百をの 休う ふ 蔵りを 如舟
かへを末を認よ深さ他の月 業宝
百味より そねの 荒るふ菜飯 文都
なむるくゝ るの 素 小 卜柳
るれ雪の 美りをまのく 扇る 文季

むしろと今は書なる事なれば　和哥理
一歩をうの翠ふかやかくまれば　不染
作く硯よいく新樹の蔭清し　向涼
はくくと積信くはやかんこ多　笑月
とくく硯にうくまうやの月　山業
よ向きり自然の信れ苦れも　文筑
墨をふれの多も筆をやは書の日　古樹
をれまり信ひくこうしまる山　一元

ふのりを行をやもものうりまん　海波
うはり五位石ふうまれの多涼　可橋
まをいりく多も嘯ふ義塚　一笠
作者只ふをの松をこうる凡　芸話
いちまをまをやは今も筆ろうせ　如流
石ふうれいろを魚ふうまふ小　五狂
其信や　こうを書新南　谷　文明

南淵をねぎ思ひの水暎して世板の書よ
ゆゑ沈みてゐるとなる終に空下らる
へし作者　そもそもの義もそもそく家と
杜多を保ちて繍物と降ひのふされい
山川もそなくとものそもの名と降ちやい
そん今そそこ二月れ石ふ杉の沼ときめてせく
いそねよ他時の名れちりと崇めもれ
沖雪庭くそ学よ

松板の志ゆゑ雲の棲ところ　琴而

羽黒山連中

南谷れ雲を作者祖義石板の地うて
雪と業ゆゑの業詠あるより尚ゆゑえりと
千果ゆかりけんとゆゑ山主翁ゆ家と
後て墓碑を造立ゆゑ小系祀の弦
造とひゆゑる小業幸ゆれ叶ゆあひて
赤くゆゑ赤りへゆゆゆゆるれ法れとくむの
面自ゆるへしゆ奥作ゆゆゆ法ひ作りて

石ふゆゆ板業りやゆゆる　僧　を素

こゝに雪もむれ雲や夜の月　、雪月
花りあふ言の葉くさもろの恵　、一止
まる葉ろ紫とろまれよ向ひ　、少年柳糸
家伽よ浮む清ろ清ろ清の雫ひ　呉松
清清くてろまや夜れ月の影　呂秀
碑と浮む青葉ろ紫ろ紅　思月
笑と結ふ桜もまれよ向ひ　茶好
生れ花る思いくくて夜平立　竜林

言ふ葉や葉ろ葉ふ浮む蕾塚　壺友
ろの俳と嘗て世ろ葉ろ夜　友和
塚ふ葉ふ塚ふ葉ふ月ふ南　苔　此君
葉れ俳と行けて山の走けて　ひ　茄芝
清れ浮む葉ふ上清ふ夜の山　三省
和の葉れ雪も葉ろや白　谷　其杖
ろの葉れ俳清ふ花ろ葉ふ　麦波
俳や葉の清葉の月ふまて　呂琴

作く附言を一夢の[illegible]こと　竹系

[illegible]と少[illegible]る業や南岳　文井

佛[illegible]の苦[illegible]ふをかんこと　如仙

凡[illegible]て事[illegible]業や境仏業　四芳

南岳の祖業の言詠を遺し[illegible]の修行

[illegible]こと[illegible]者自塚と造立せられ鐫

磨の功[illegible]ちて[illegible]仏者の

特造をひ[illegible]ると移除[illegible]力せる

少[illegible]を摩未と評され接言[illegible]して

[illegible]て[illegible]の業や玉柏　己爾

[illegible]祖[illegible]の[illegible]と称[illegible]て

造立[illegible]と命ぜられ二[illegible]

[illegible]と[illegible]て[illegible]を切[illegible]

[illegible]の特造を[illegible]

一句を[illegible]す

解[illegible]の業接　僧友己

名録

涼しさや新をふくめるの月　仁賀保伊勢地 鳥道

臘八や雪の翁まねちの屋根　哥麿

とけふきさ子供の欲や雪丸け　、院内 魯仙

口たゝうふいりかゝる夕雲雀　里卜

名月や松を我らも眺けり　花仙

此花の蔭吹けて萩りけ菊さけり　、平沢 千之

雲の色をとうしてゝ梅の色けり　棧石

ほくろは鳴や入日の汐くもら　本庄 羽觽坊

破芭蕉ひらりひらりとて来りし　乙雪

汐焼の神子をも白し小春かな　桃菜

霊場を玉のいろいろの氷柱かな　雄竜

手をあておくれてまゝり村尾むし　如仙

鳴合の声うつある火鉢かな　新庄 有琢

崩れ井まるの世まして鳴鶯　此谷

法螺の音や峯を探の雪吹かな　素能

為相卿や紙冊し尾をありふる人　吟徒
堅横ふるいろの つくも神　山　玉溪
日ふるの神ふるや雲井の連歌あり　蛸浮　北之
ふもとの切石　鳥海ノ禁　檜　己
うゑ家ふるむの高や仏七今　市条　左松
鹿しまふ路あ木のうゑと草枯　砂戎　化緑
伝保姫の形ひるてや紙れ　飛鳥僧　宥雯
稲舟ふ月の上八夢や高上川　慈石

永ふるや尾ふれ陸ふ夢を引く　酒田　花笠
筆月の俳や尾系れうふ小ふ　僧　大嵩
机ふ傑てふや秋の色　之逸
富士ふ吾書ふりや入物の文　其要
松ふりまるふて枯や山　空兮
お髪の俳ふふる石濃ふ系　岩二
又立や時りふふ時ふ己　女　千多
就膳や正重ふてあふふ　布月

屋ゝの夕をいやけ一脇目　祖堂
ちゝ雫や菊ゝ　千鳥
宗一の辻ゝくゝふゝ系祥　淺柳　糸
一筋ゝいなく雪降や　丁　板井沢　花由
抱て孫ゝ見ゝ蒸ゝる　トヽロキ　霧菊
月影やいゝく叫ゝ　田屋　月巣
を聲ゝ松とゝ　藤島　ゝ仙
雲ゝゝやふゝ死初る　花めゝ　休吾

入ゝく月をまゝよくゝや　拓尾　僧　破宗
まゝ西ゝゝゝ曙ゝゝゝや合歓ゝむ　女　柳里
初雪や巨燈を燈ゝかゝて出る　古傲
仲時て雪を　平沙ゝふゝゝ　町屋　一毛
心ゝさ移ゝ寒ゝ　ヨコ川　里毫
跨くゝゝ川を渡れて沙　千深　イナリ　新南
淺瀬の底ゝ深ゝ　由良　李曉
ゝ松ゝ時の　加茂　蔵兮

枯弾糸月心すけふよ入るり　東仙
ひのくしんふとふ御よ　まそ　象石
松の月や二書目の参考書うり　以寛
くはくれあ古墳ひくりを　芭夕
源しけと月ふるる竹の義ふ　可竹
月ふして不破の関守の夕ーられ　万里
雅ふれ月ふ欲ある恵扇ル　象扇
ふふや十方定めるうまま　僧金鼓

蛙の音ふ入るり絵ふの多　物遊
乳母ふ東ふ幕のひつてをふル　知釜
出代やいふけふるふ物ふ　菊五
源しふや信ふうふく罪の新　其林
名新や栄の戸却くなしあり　松青
暁の雲ふれふふふふくら　古松
多ふんて一枝ふるれの吉　仙二
彩ふや何をふてふの空　浦雲

春風の吹けば散るかと附箱の花　英之

七月十幕うちむの高れり　大山　熊四

引汐の跡よりあらはるあるあり　北枳

秋風をうらうらと点ずる女郎花　桃翠

名残よりうらうらと高の花　里鵬

討ひよりあらはるあるの書　桃夫

をうて新酒を産しれば　季友

○

雀岡

夢や桜を一抱　二三　編　秀雅

春雨や雲の下ちくるの言　紫東

水の影を独りしるの去　女　小郷

与江月うらう沙汰むの神原　文洋

朝や赤旅人の沙汰　東里

ちくうやはるよいくるふ春　雪水

遊戯よりよりへの月の雲　文花

扇の子春うるの柳うる　吐風

法良寺にて雪中こしきの風　一歩

小京女のよ抹ひ白しまのうを　浪遊

ほうん咲く雪や笠うち敷き　冬梧

梅やの新よ立こむし　紅葉

冬枯よ殘てえへうの物の的　川警

月の手吸ふて葡萄の咀ふ　味嘸

眠りふう髪結ひうの雨　如揚

神うの生ふ　抹ひ様　以一

牛飼の森やねうれる蓋竹　壷竹

ふ茶物ふよふうふ　☆松風

涼しよや田つう吸ひ月の筋　知業

出家よや例侍の松眠り霧　隆志

ひうれようれうれ杜鵑　喜東

冬の窓行月ふ友もこうう　安雞

五月雨や傳ふ月の梅ふ　可知

秋の初れもうれ月ふ吸ひ　梅右

春上で戸を立てやむる年云　以東
連てを用ゐるのみて祈却　以文
雲のうち水とおさまれて信ふ行　於可た
蓋の新し深のやはの月こ　僧　義教
住吉や庭の掃除のおまて又、　思貞
年の屋やに深の表も掛へられ、　任他
掛し分し金をとれ山ひて、　知之
茶も沸こ湯もやもの月、　化考

和の茶うこうを芦の茶を小、　自香

○

住所ゆりの年うるこ山　保寛
玉くもりこれうる雨を茶る松小　君玉
雲のりや陸を移る　玉京　光二
を柳や沒や戸の稜の晴　加山
茶る茶くも天を掛れさうり小　文羅
名源に松茶こうを笠のうへ　風山

夕日さして石垣の上傍や苔の雪　吳竹
箕ゝやの雪まさりて丁の夫　葉陰
枯野原九のおよるをふり雪　松竿
旅人の宿よ仕ゝ月ゐ仕一考
仕る氣もなくて枯野　孤子　柳子
雪ゝ降空のゝる新酒仕　文竜
傾城の挑灯ゝ月ゐゝ　寛呂
茶屋をまさ書信中や柳の玉　千鯉

よ松の雪ゝ降仕ゝ　桑乃
新宅の住居ゝ　胡桃
孫ゐゝて咲ゝれゐゝ仕　二凡
ゝゝゝ唐ゝゝや　沾林
外濠ゐ濠濠中ゝ　如雪
鶴の国ゝゝ仕ゝ　多七
竹濠ゝ飯ゝゝ　一ッ　竜子
風の吹ゝ仕ゝ　亀

奥ふかき戸もあけて雪ふん舟　仰牛
美称や流れあれば杉の牛　文筑
踊りまれ飯吟ふて春ゆかし　杉眉
行里や桃の中ゆく柳の冠り　金雪
凡さまくあもしまされば上等術　翠系
きけばこそ玉ふさ里も多の多　琴仰
紅をとゝのもて月の露ゆ　扇杉
いけこまて杉ゆりしゆのゝ　子諸
あこそさや岩の上ゆく京の凡　子玉
進りあてし今いそう　格者　共話
角やまさ去こさ　ふ郭　卜仰
杉ともあて楽の月とあるよ書　琴面

○

夕移りあれ恋ふ心の琴系　如舟
二けるの鉢と松ふや河道　葉里
引汐よ福とひそう仰うふ　文郁

餘呂や九行燈の松の陰月　文書
日に向て山の尾越や望鹿　松比
山もれ残さひ　や咲ぬ　子山
我家を見捨て見ぬ　和尚
夜の嵐うこうて月小舟　千口
月影を弱いて見ぬ　松嫁
夕日さて松陰小川くる　笑月
雪れ行や湖を渡る者　四考

雪れ見る清ぬ月の冥　和律
枝一本ありける葉五　五茂
第ぬ月の背　俳菊の玉　浦凡
禅もとさせて牡丹の蕾　茂雨
ゆきも見る清て夕塁の紅牛　桂玉
芭蕉るりよ業ゆりの子紙　兎山
玉の玉よられて庵の田打　山葉
玉合の月ゆ夜の玉れ中　思曙

むちへいて見しさはうすい　古梅

人のきれ捨られ門や小夜時雨　子譲

取り〱に浮語と出る月も今　偉也

印のむとあるへに寄れ車かな　月昇

汐撈桶におりし小春の夕日かな　素山

為糸して比叡の参り雲もなし　向識

松風や戸ゆしもゆ浦のち　海話

おのか身をとえて見る雪の宿かな　一貫

往うさハ雪ゆもりそ山ゆくら　可橋

積にある屏風も物あて冬籠　文亀

雪晴て榾火れ氣や宗隣　和古理

酒谷や書読なりの枕れ気　不除

禮柳に孤のよれそきり　五狂

涼風に大子ひろけて白ひ哉　如流

大宮れむ咲にまり冬の月　文明

山渓や標もなくて松のむ　文二

○

羽黒僧　寺泉

深作雪さそ誘ひ新そ　雪月

雪やはしらへ人をの多　余月

白雨の清りしや紙子哉　如幻

ちりとてを掃て玉ゝ苔のも　一止

山吹のうし洗ひ流す　少年柳糸

芭蕉葉ふるゝ雨の松　竹山

冥さうみ九葉の雲小　吳遊

紙布の鼠ゝ旅の暗　呂秀

紙布雪の如朱を鏡哉　巴月

あれも又宗ゝの雪の茶　文中

冷泉の清ちや玉を佛　茶好

ゆさうさ山や松を咲ふら　椿亭

雪竹の雫路ゝを岩ゝ　乞林

祝ふもうさ雪や麦の秋　壺友

茶の香れ人ゝ別や文束立　友和

折ふしや竹の中なる蛙の声小　此君
山城の笠いとかしまあり　茹芝
暁の雲積まさりやうやうさめ　三省
帰るさも無常をなげく小　其杜
格書の消へ行や言灯籠　麦波
行くさきれて稀なる鶴小　少年　泉逸
庶のるや松ふる雪をかいてり　呂翠
茅の戸を竹の折くや松ふる風　奇庵

源氏や讀捨の古草子　可調
面影に実の心ある松と雪ふり　巳流
面白ふ氷くるるや流の手　雨流
名月のおしかやうなる所小　可静
芸あるり茅ふるる流手小　池東
夕白ふこと日月くれて底ぬり　居甕
碎玉の柄杓ふたく氷ふ　友芝
苔の系ふれ気のもれる流手小　竹系

花の枝も凡まりやすり沐の菊　文井

燥掃や炭ゝ釜の佛ゝ　如仙

ひし結の横ゝ信ゝ後佛ゝふ　曰芳

翁の屋ゝ寄り博ゝや去の雪　山雨

月うちれふさこゝとけれ沐の菊　僧友山

○

河ゝ江の中ゝ寒ゝの孤　故人竹南

柳ゝ寒り深ひゝて去れ雪　、華古

南谷蓋蕉ちゝ子ら蕉領国機の

一隅也ゝれ山ゝ芭蕉谷堂嶽

柳ゝ急節清冷ゝ寄仙の俳諧

奥山ありゝ四流ゝれゝ風ゝの

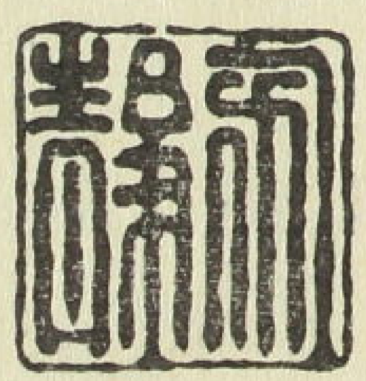
志ゝ子ゝさゝとうゝむゝ　戊寅

弟の忌月師の塚と設け遺句と

明ゝて ちりを遐代に伝ふ宴に
杜事なん人とけるのもの なまく
御ことを考て伝書の延をひらくに
諸風吉の時詠んなさる名目ても
感やおれ風流ありて比るに不堪
なりといへとも年月のふるさとをうけし
その悦しく拙き一草を清くりて
寸清を述るてなん梨

如まくく後 多多やむすめ栞らし

一味堂



附録

月山
谷有塚

南谷之圖

元禄二年六月四日於
羽黒山本坊興行

あかすやとめくるもはの雫　翁
行くえ人のむすぶ夜の竹　露丸
川舟の綱ゝ曳て　曽良
粉の花ふめくゆる月　釣雪
池ゝ天とうつる秋の雲　弥妙
小ゝ雨もふりすぎ　梨水

眠てゝ星は降りすぎて　釣雪
百里の旅を不日の牛追　翁
山つくゝろゝ協れ汀をとん　露丸
斧打　まくむ　神木の表　曽良
寄ゝ人の設ゝひ家ゝて　釣雪
ゝゝゝ　何と峠鬼　露丸
古跡訪とゝなる桂ゝ菅　翁
糸ゝ立枝ゝさくゝの萩　梨水

月ふる引結されてうつしさ　芳良
髪あふる羅乃　秀　翁
まうる犬のうしむ折て　露九
的場の赤りさける山吹　釣雪
素を絡れ七ッれ幸の力石　翁
汲ていくく硯ゥ井の水　露九
引のうさまもひり蓑　参入
敬の門ニ在　祝ニ　皆良　芳良

かさ沸る芳を師井地義て　露九
素こしするゥ山犬の群　翁
うし雪を櫟の拓茶のようく　梨水
湯の芳くる加減さ　秀九
籠のをと移宮矢とさて　釣雪
簾うけしりる在すれ法　参入
月山乃嵐の風を骨に　芳良
涌沿ゥ火のこて電の新　梨ゥ

[illegible] 露九
[illegible] 雪
[illegible] 菊
[illegible] 良
[illegible] 會覚
[illegible] 梨水

古奇仙行

芭蕉七
露丸八
勢州 曾良六
花洛 鈎雪六

梨水五
江州飯道寺 圓入二
會覚一
南部法輪院 珠妙一

餞別

[illegible] 金羌
[illegible]

破つるも夫の栗の弓を抜て　不玉
汐よ清きる　られ　を　涼　芳良
幸を　る　人商人の家うま　重行
雪のむ乃あ　こ　さく　咲　霧丸

六表六句

六の一巻は雪ふる日集も

いてあ　わく　雪ふる而之たくの
和ゐ　ゐ雪をこ　ゐ面　答と
あ　ゐ例の　よ再　ゐ行
ゐ　へ　又表六句　けゐ
銭ゐの　れと　ゐの

帝國圖書館藏

芝雀焦唐秘書

羽黒山別當秘行

不分與

天宥法印

[illegible]

[illegible]

[illegible]止觀

圓覺の仏

智月用今

[illegible]

[illegible]

[illegible]

巨靈の力の堦の
坊舍を築、階を

なのりそのみ

一刻年て

ちとせ経し

たゞあ物なるまよ

物ゝ羽ゝ

同墓ゝ

さゝ行ゝも

いなのゝさゝ

しるやあん

いつゝ國

ハさゝ汐

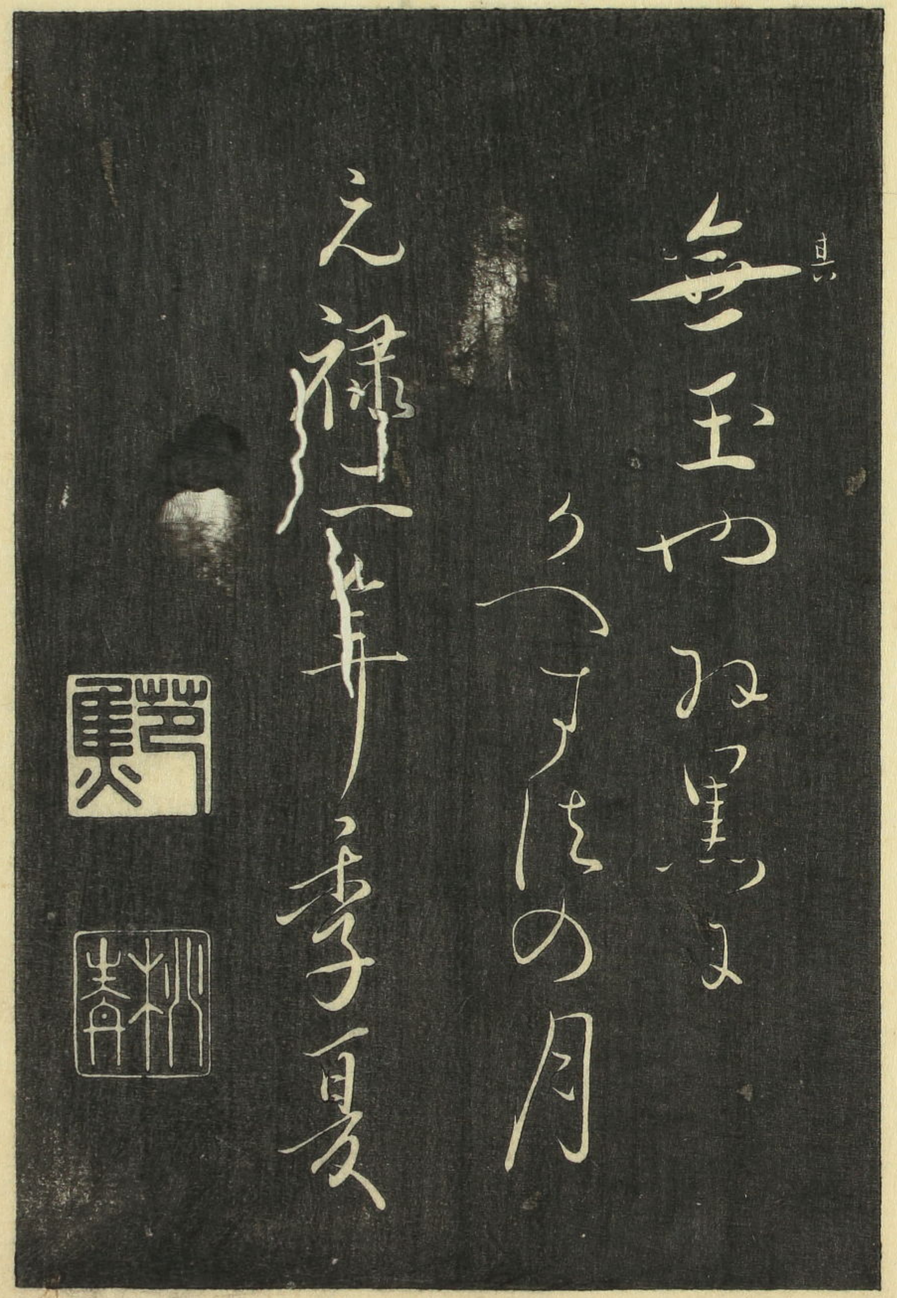
下皮三ム

叫礼の序遠悼

一句をつゝ

しゝ門徒

すゝ之らゝ

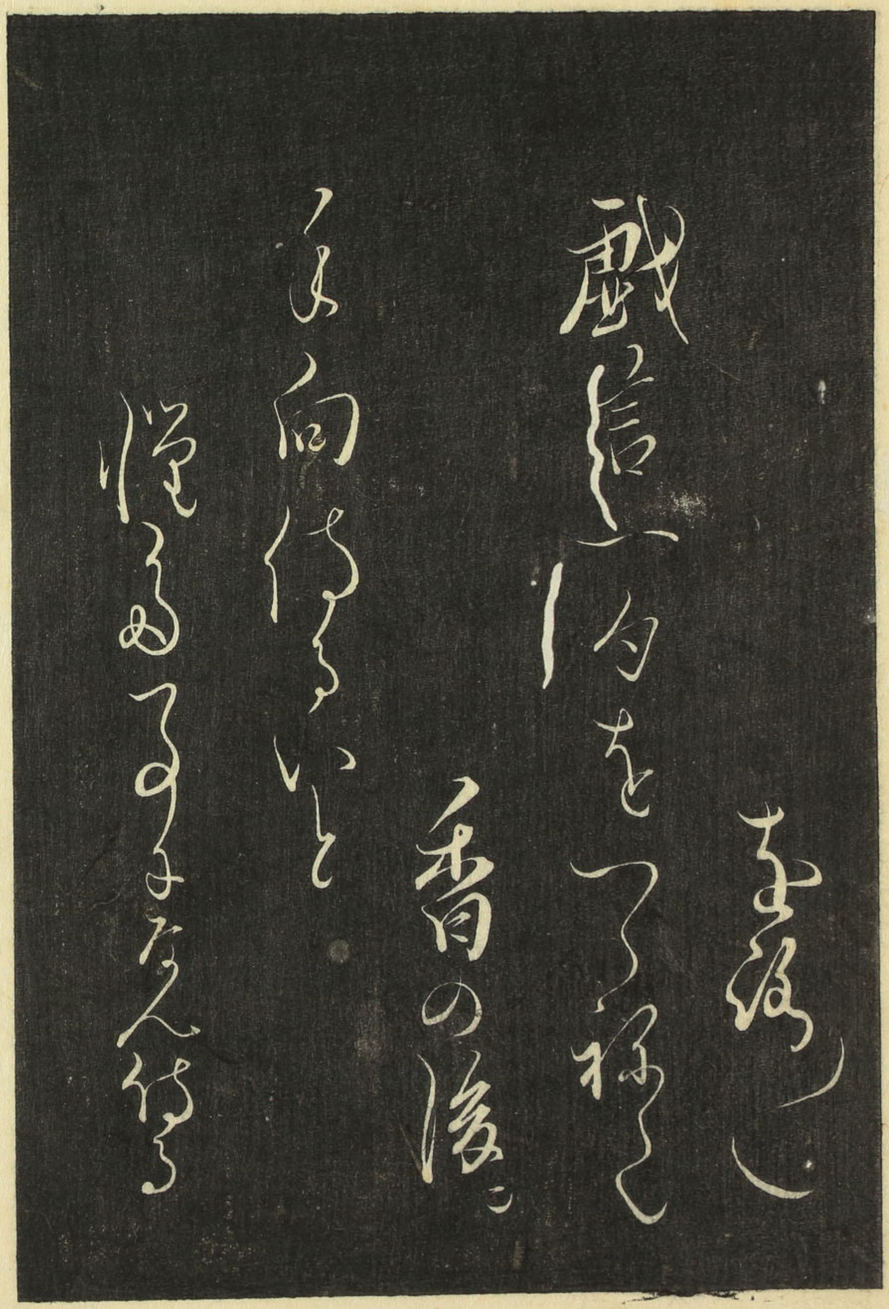


其

無玉ゆ　ぬばたまの

うつせみの月

元禄十五年季夏



春雨

戯信に匂をつゝみ

香の海

夜向ふいと

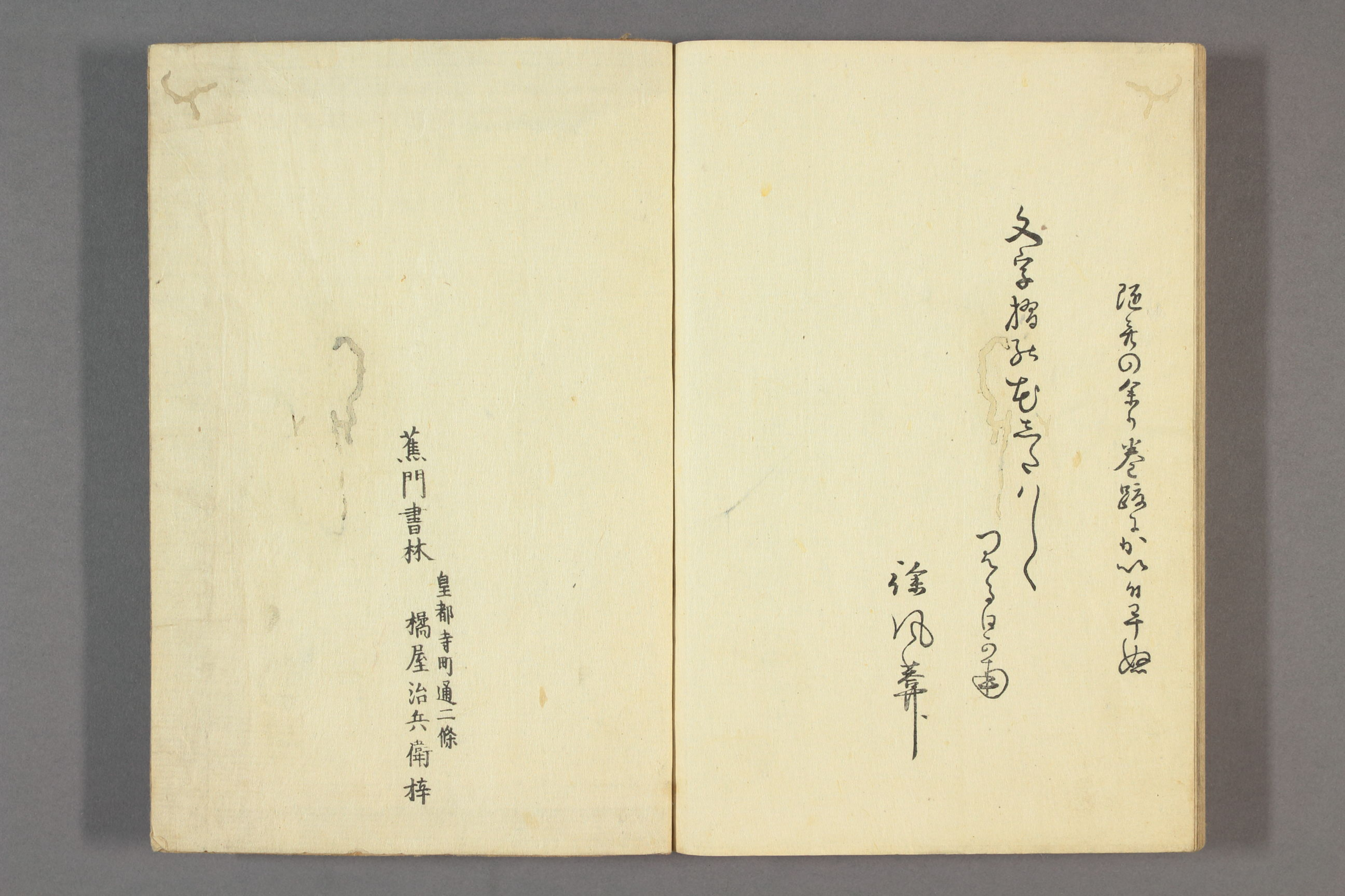
恨るすゝなん行

真蹟の一軸を本坊寶蔵院の
所蔵なりとて受とられさむ
こゝろ[illegible]るこゝちもれと
模寫してこゝのを同志の人に
れ示ふ侍ふ

望者て章誕さきなる族
家とゝのしより甘欲あるこ
国ゝ醒望て物を座むまいる面
あゝ須世れの中は奥乃面ゝを
こゝさき伊のまあるようかひて
文章の花實漢人踊躍しむを

高野さまをなつかしうて祖黒山
一時堂に師匠かあり有縁の地に
ちらしなくていとたふとう愛越し
多し所謂豪傑松童曳
ありて碑の造立恩謝乃供養遠
やうなる始末を不拘と伝ふる
冊子をあつて閲場とあるべし
霊を祀まつる地理とある地に画図と

うつし清やうぬ鳥のあとの如
代々伝来の真跡を墓しく
涙もこぼるゝ書なん
書あまたはさし書を
祖翁の冷光を拝世る弘通し
其神に徳国に光輝を
又光かりのうしいちまるく
拝れを拝なる礼を作ふる



蕉門書林　皇都寺町通二條
橋屋治兵衛梓